

実証的に歴史を追った人ごとに

ときおり昭和史を含めて近代日本史を実証的に検証してきた人たちと会う。そこで必ず話題になるのが、これまで集めた史料や文書をどうして保存するか、いかに次世代に伝えるか、という点である。

大学で禄(ろく)をはんできたなら、研究室に残すという手もあるのだろうが、私や私の知人、先輩たちはそういう手づるをあまり相手にしたくない。民間の施設で誰でもが史料を自由に見られるといったアーカイブのような施設をつくれないうかというのが共通した意見なのである。

作家の半藤一利さん、山中恒さん、そして鎌田慧さんや私のようにノンフィクションの分野で数多く史料、文書を集めた人たちには、どうすればそれらを次代に伝え、それを生かしての歴史観をもってもらえるかが差し迫った問題だ。

半藤さんは昭和20年代後半(1950年代前半)から昭和前史関連の軍人(将官が中心)の聞き書きを進めたので、その記憶の中には軍事指導者の回想談が詰まっている。私自身、「嶋田繁太郎という開戦時からの海軍大臣は、玄関で面談を請う僕に一言も口を開かないんだ」という話を聞くだけで、嶋田が歴史にどう向き合ったかがわかる。とにかくこういう体験談そのものが貴重な史料なのである。

私は半藤さんから20年ほど遅れて陸海軍の軍人の聞き書きを進めたので、将官や佐官でも大佐といったクラスにはそれほど会っていない。逆に昭和40年代後半(70年代前半)から昭和60年代(80年代後半)にかけて、佐官、尉官クラスにはずいぶん話を聞いた。大体が省部にいけば課長クラス(一部は局長)、戦場では連隊長や参謀長クラスであった。むろん私が聞き書きを始めたころには存命していた将官にも、その体験談を聞いている。

一例をあげると、陸軍中将で開戦時に企画院総裁だった鈴木貞一には、90代の終わりに2回ほど単独インタビューを試みた。その速記録を改めて読むと、多くの示唆に富む発言をしている。例えば、開戦前に、「自分はモノ(戦力)がないからアメリカと戦争はできないと思っていたけれど、開戦直前にはモノがないから戦争を選ばねばとなった。モノの重要なのは石油になるが、開戦前は誰もが逆転してモノがないから捨て身の戦争になったんだ」といった発言は、まさに戦時指導者の間にいつの間にか空気ができあがっていたという事実を裏付けている。

その鈴木が、戦後日本がアメリカを頼りにすることの愚を執拗(しつよう)に説いていたのが印象的であった。「あの国は伝統、文化がないだろう。勝った、負けたというだけで暮らしているようなものさ」と繰り返していた。

こういった証言は、私や半藤さんにも無数にあるし、最近も昭和史を動かした人たちの子孫から証言集を残したいと史料が届いたりしている。「どこに置いてもいいから、受けとってください」という言もしきりに寄せられる。

戦時下に少国民だった山中さんは、むろん児童作家として著名な一方で、「私を少国民に仕立て上げた国策」に怒りを感じて、戦前の史料や書籍を大量に集めている。「きちんと残して後世への戒めにしてほしいんだ」との言に、私も何かしなければと突き動かされている。

太平洋戦争研究会を主宰している平塚枢緒さんも膨大な史料、文書、それに証言を持っている。自分が亡くなってもこうしたものを残すところはどこかにないかな、と会うたびにその話になる。平塚さん自身、戦後はジャーナリストとしてほとんどの戦跡を訪ねているし、連合軍総司令部(GHQ)のウィロビーをはじめ何人かの将校に会って証言も聞いている。80代に入ってもなお戦跡を訪ねているエネルギーには恐れ入るばかりだ。

戦後社会の昭和史探究に実証主義的手法を持ち込んだ人たちの役割はそれなりに重い。残された史料は散逸し、聞いてきた証言があえなく消えていくのは惜しまれる。若い編集者や昭和史研究の在野の人たちの間にも少しずつ私たちの思いが通じたのか、なんとか「昭和史料館」「昭和アーカイブセンター」などをつくりたいとの機運が生まれつつあるようで、それはそれとして私もうれしい。まだ一粒の種もまかれないうちではあるが、いずれこうした運動が形をつくっていくことになればいいと期待をふくらませている。

私の夢は、1軒の資料館に1号室から10号室、20号室といった形で、それぞれの部屋で史料の展示や証言集の閲覧などを行うシステムである。1号室はAさん、2号室はBさん、3号室はCさんといった具合に、各部屋に実証主義的手法で史実を追った人たちのそれぞれ独自の資料館をつくるのである。むろん予算も土地の手当ても何ひとつ動いていないにせよ、こんな資料館をつくって、昭和という時代の全体図を次代に伝えたいと思っている。「人類史の見本市」である昭和は、後世の最大の教科書になるとも考えるからだ。